2024 年度 心理学部　高大接続入試【事前体験型】の講評

事前体験型講義

2 つの事前体験型講義(各 70 分)を行いました。前半は、「実験心理学で考えるヒトの視覚」と題し、実験心理学の基礎について講義しました。まず、自然科学において実証性、再現性、そして客観性が重要であること、特に実験心理学では“こころ”の働きを数値化して検証することを説明しました。その後、さまざまな錯視のデモンストレーションを用いて、錯視が単なる誤りではなく、日常生活で効果的に機能している視覚メカニズムの副産物であることを説明し、視覚が脳の認知機能の一部であることを解説しました。後半は、「発達心理学で考えるヒトの発達」と題し、発達心理学は何を明らかにしていく学問なのかについて研究事例を交えて解説しました。子どもは何歳から嘘をつくことができるようになるのか、チンパンジーは他個体を欺くのか、人間の善悪の判断は年齢とともにどのように変わるのかについての研究を通して、発達心理学では、(1) 私たちのこころの働きが成長につれてどのように変化するのかといった個体発生の視点、(2) 私たちのこころの働きが生物進化のどの段階で獲得したものかといった系統発生の視点から解明していることを理解してもらうための講義を行いました。

レポート

レポート課題は、２つの講義の内容をどのくらい理解できているかを確認する内容でした。前半講義内容（「実験心理学で考えるヒトの視覚」）に関しては、多くの学生が錯視を通して視覚情報処理のメカニズムをうまく理解し、レポートに反映させていました。しかし、一部の学生は錯視現象の表面的な説明に限定され、より深い理解に至らなかった点が少し残念でした。後半講義内容を踏まえてテーマ（「発達心理学で考えるヒトの発達」）について論じるという設定が難しかったようで、講義の感想にとどまっていたもの、実験や調査内容の説明に終始したものが散見されました。求められていたのは，実験や調査の心理学的方法を理解し，それらがヒトの発達を考える上でどのような視点を提供しているかについて論述することでした。

まとめ

いずれの講義も、大学で実施している授業の内容がベースになっていました。高校生にとって、普段の授業とは異なる内容あるいは形態だったかもしれません。しかしながら、環境の異なる大学での授業でしたが、臆することなく、熱心に聴講する様子や態度が教員にも伝わってきました。レポートは、決められた時間内で、求められていることを要領よくまとめて、論述する能力が求められます。今回の学びを糧にして、今後の学業でも活かして欲しいと思います。